

革新的技術活用特別委員会会議記録

革新的技術活用特別委員長 毛利 正徳

1 日 時

平成30年3月28日（水） 午前10時30分から
午後 0時06分まで

2 場 所

第6委員会室

3 出席した委員の氏名

毛利正徳、吉富英三郎、麻生栄作、森誠一、末宗秀雄、木田昇、羽野武男、
小嶋秀行、戸高賢史、桑原宏史

4 欠席した委員の氏名

なし

5 出席した委員外議員の氏名

なし

6 出席した執行部関係者の職・氏名

情報政策課 参事 安藤善之ほか関係者

7 出席した参考人の職・氏名

モバイルクリエイイト株式会社

技術部開発統括室長 桂清太郎、技術部第二開発室長 渡邊佳之

ジャクール株式会社

代表取締役 後藤玄利

デジタルバンク株式会社

ブランドマーケティング事業部課長 内田晃和

8 会議に付した事件の件名

別紙次第のとおり

9 会議の概要及び結果

- (1) おおいたI o Tプロジェクト推進事業の取組について参考人から意見聴取を行った。
- (2) 今後の調査項目について協議した。
- (3) 県外調査の日程等について協議した。

1 0 その他必要な事項

なし

1 1 担当書記

政策調査課調査広報班 主査 後藤仁美

政策調査課政策法務班 主査 中尾耕也

議事課議事調整班 副主幹 長尾真也

革新的技術活用特別委員会 次第

日時：平成30年3月28日（水）10：30～
場所：第6委員会室

1 開 会

2 参考人出席要求の件

3 付託事件の調査（参考人招致）

- （1）おおいたIoTプロジェクト推進事業の取組について
 - ①IoT・AIを活用した医療介護支援システムの研究開発について
 - ②QRコードを活用した多言語翻訳プロジェクトについて

4 その他

- （1）今後の調査計画について
- （2）県外調査について

5 閉 会

会議の概要及び結果

毛利委員長 これより革新的技術活用特別委員会を開催させていただきます。

本日、おおいだIoTプロジェクト推進事業について調査を行う予定としていますが、別紙のIoTプロジェクト実践企業を参考人としてお招きし、意見聴取を行いたいと考えています。

それでは、参考人の出席要求についてお諮りします。

本日の調査に係る参考人に出席を求めることについて、御異議ありませんか。

〔「異議なし」と言う者あり〕

御異議なしと認め、そのように決定いたします。

それでは、参考人をお呼びしますので、しばらくお待ちください。

〔参考人入室〕

毛利委員長 皆さんおはようございます。一言御挨拶申し上げます。

大分県議会革新的技術活用特別委員会の委員長を仰せつかっております中津市選出の毛利正徳でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、IoTプロジェクト推進事業の取組をされております皆さまを参考人としてお迎えし、御教授いただきます。皆さま方には、大変お忙しい中にも関わらず、本委員会に御出席いただきましてありがとうございます。心から厚く御礼を申し上げます。

本日は、最後までどうぞよろしくお願いいたします。

〔委員自己紹介〕

毛利委員長 それでは次に、参考人の皆さまから自己紹介をお願いしたいと思います。

桂参考人 モバイルクリエイイト技術部の開発統括室長の桂と申します。佐伯出身でございます。よろしくお願いいたします。

渡邊参考人 おはようございます。同じく、

モバイルクリエイイト株式会社の技術部、第二開発室の室長をしております渡邊佳之と申します。よろしくお願いいたします。

後藤参考人 ジャクール株式会社代表取締役の後藤と申します。あと、一般社団法人タグフィットというのもやっておりまして、それぞれ東京と福岡にあるんですけども、私自身は臼杵市出身です。よろしくお願いいたします。

内田参考人 大分合同新聞グループデジタルバンク株式会社ブランドマーケティング事業部の内田と申します。大分市出身でございます。本日はよろしくお願いいたします。

毛利委員長 ありがとうございます。

それでは、本日の進行であります。まず、皆さまから順番に御説明を伺った後に、質疑、意見交換を行いたいと思います。

それではまず、モバイルクリエイイト様よろしくお願いいたします。

桂参考人 モバイルクリエイイトと申します。本日はお招きいただきましてありがとうございます。

資料に沿って説明させていただきます。

まず、会社概要についてですけれども、3ページ目になります。

当社はモバイルクリエイイト株式会社で、本社は大分市東大道2丁目にあります。代表取締役は村井雄司。設立が2002年12月27日というすごい年末なんですけれども、今年で15年ともうすぐ4か月ぐらいになる会社です。大分県に育てられたような会社でございます。

事業内容としては、移動体通信事業。ここでいう移動通信というのは、無線を使ったドコモ様とかau様、キャリア通信を使った、今でいうIoTをつないでという走りのような事業を設立時からやっております。

資本金は10億円で、今現在、従業員数は単体で167名、連結で457名という数に

なっております。ちなみに私、2004年に入社しましたので、その当時はまだ18名でした。そういう会社で、急激に伸びております。

次のページは、会社の沿革です。

いろいろ沿革はあるんですけども、我々のターニングポイントとなるところを重点的に御説明します。

2002年に設立した後に、いろんな移動体通信の事業をやってまいりました。2009年の業務用IP無線システム「ボイスパケットトランシーバー」の開発が一つの契機になりまして、これはどういったものかと言いますと、今よくちまたで言われています格安SIMというものを、我々の事業としてMVNO事業というのを立ち上げて、そのSIMを無線機の中に入れて、携帯通信を使った、見かけは無線機なんですけれども、通信網はドコモの通信網を使うという製品がタクシー事業者様にすごくヒットしました。これが非常に売上げを伸ばしたというのが一つ大きなターニングポイントになります。

その後、その販売が伸びたため、2012年にマザーズ上場、翌年2013年に東証一部上場することができました。

2015年には、IoTによって*c i D r o n e*という会社を設立して、ドローン事業にも今力を入れていることになります。

続きまして、グループ相関図で、当社のグループは今約7社あります。そのうち、大分県にありますのは、この装置等関連事業ということで石井工作研究所様は我々のグループになります。今、我々が本社を置いている場所も石井工作研究所様の大分駅前の本社ビルの中に一緒に在籍しているんですけども、そういったグループです。

あと*c i D r o n e*さん、こちらはドローンの製造販売と、一応開発をしております、先般、宇目町で、10キロの荷物配送のドローン実証実験が、宅配事業のところでもニュースにさせていただいたんですけども、カスタムドローンに力を入れています。

あと、これは装置事業として、我々が今後IoTとしてロボットを含めて強化していく事業になっております。

また、右側の情報通信事業というところは、株式会社トランというのは観光事業だったり、真ん中にオプトエスピーと書いてありますが、こちら2社は東京の方に本社がある会社になります。

あと、海外事業も力を入れていまして、USAの方にモバイルクリエイティブUSAというのを2年前ぐらいに設立して、当社が、先ほど言った2009年に販売したボイスパケットトランシーバーの世界展開ができないかというのを、今いろいろと試行錯誤している状況です。一応、お客様もちょっとずつですけど付いてきている状態になります。

続きまして、経営統合というところで、今我々グループ会社に2社ほど上場会社を持っていまして、非常にフレキシブルな動きができにくいということで、会社が持株会社を設立して、そちらの方が上場することによって、2社はその下に付くということを今年度やる予定になっています。今年度、我々の決算期は12月末なので、それまで、今年中ですね、共同持株会社を設立する予定とここには書いているんですけど、昨日、株主総会で承認されまして、その方向で流れると思っております。

次のページになります、7ページ目です。

主な事業内容としては、我々は五つのコアを持っています。通信、サーバー、音声、動態、決済と。ここの五つのコア技術というのが非常にIoTと親密に関わってきています。特に通信というのは、我々自体がMVNO事業者として、ドコモと同じように配線を貸し出すというサービスを持っておりますので、それによる安定した収入が、ストックという言い方をしているんですけども、設立時からだんだん増えてきている。我々の事業活動をする上で非常に大事な事業となっているのが、通信です。

あとサーバー、これはクラウドビジネスで

す。どうしてもさきほど言った通信事業をやると、GPSというのが切っても切れないので、そういったものをソフトウェアとしてお客さまにサービスとして提供する。なので、通信とクラウドを使ったサービスというところを主にやっております。そこをコアとして我々も、常に重要視しながら開発しているといったところになります。

あと、一つ変わり種で決済という事業もやっています。この通信を使って、タクシーのソリューションを考えた場合、どうしてもクレジット決済であったりとか、今後インバウンドで、本当にキャッシュレスの社会になるので、QRを使った決済だったりとか、我々自体もFelica端末を自社開発しています。Suica端末なので、Suicaであったり、SUGOCAであったりといったような決済ができる機械自体も、我々の中で造れるといったのが大きいところですよ。そういったことをやっています。

こういった事業が中心となって、次は売上げなんですけれども、創業時よりも売上げがどんどん右肩上がりに伸びています。大きく分けるとフローとストックという言い方をします。

フローというのは、大きな案件があれば、そこで一時的に大きな事業の売上げが立つというのをフローという言い方をしています。

ストックというのは、さきほどの通信事業ですね。通信とサービス事業で、定期的に、今でいうとボイスパケットトランシーバーは10万台ぐらいあるんですけれども、10万台の通信料が我々、モバイルクリエイトに入ってくるといったようなのをストックと言って、この二つを合わせて事業戦略をどんどん伸ばしていつている。

このように、ストックというのは、ここに書いていますが、外的要因に余り左右されずに右肩上がりに、通信事業なので、非常に安定した収益性も見込めるというのが大きいですね。

9ページですが、今現在は81億円ござい

ます。

10ページを御覧ください。

一つだけソリューションを御紹介させていただきますと、当社はバスロケーションシステムというのをやっています。バスが大体全国に5万台と言われていまして、そのうちの、ここで書いている5,600台が当社のバスロケを採用していただいているので、大体10%シェアということで、全国各地で非常に採用いただいている状況になります。

一応、次のページに軽く概要を書いています。大分県様にも提案は今、継続してやっています。

次のページです。

今採用いただいているバス会社様は、関西の事業者様、大きいところで、阪急、阪神、近鉄、神姫、京阪といったようなバス会社様で、関西のバス会社様に非常に気に入っていただいていると。何が気に入ったかというところ、やっぱりボイスパケットトランシーバーという、無線機を絶対バスは積んでおりますけど、それを置き換えて、プラスアルファGPSを使ってバスロケーションができるので、今までであった無線機を破棄できると。なので、ランニングコストが安くなるというところで非常に採用いただいているところですよ。

直近の取組でドローンを書いていますけれども、我々が今やっているIoTと言われているハードウェアは、常に造っていますので、そういったことを音声をつなげて、次のソリューションということで、いずみの園という医療系の御説明に移ります。

渡邊参考人 ここから、渡邊から説明をさせていただきます。

今回、平成29年度おおいのIoTプロジェクト推進事業ということで、こちらのプロジェクトを立ち上げさせていただきました。IoT、AIを活用した医療看護支援システムの研究開発プロジェクトということでやってきました。

さきほど桂から説明がありましたけれども、弊社の通信、サーバー、音声、これらの技術

を駆使してプロジェクトを進めさせていただいております。

まず初めに、入居者様の異常傾向を素早く把握することを目的として立ち上げております。

今回、中津総合ケアセンターいずみの園様に御協力をいただき、当社で新たな福祉支援システムを開発いたしました。

こちらに絵を書いていますけれども、見守りロボット、ナースコールボタン、振動センサーを設置しまして、これらの見守りロボットから、入居者様の状態を静かに見守ります。このロボットは、ベッドの周辺の温度ですとかCO₂濃度など環境データを測定して通知し、異常傾向を検知した場合、職員の皆さまに速やかに連絡をするというものになっております。

また、このロボットにはナースコール機能がありまして、ロボットを介して介護士の皆さまとスムーズに通話ができるということで、目的として進めさせていただいております。

簡単にですけれども、見守りシステムについて説明をさせていただきます。

介護士の皆さまによって日々測定する体温とか血圧の医療測定データをクラウドサーバーに上げます。

見守りロボットで収集するのは、湿度、温度等の環境センサーデータで、こちらをサーバーに通知して、各種データを分析することで、看護師・介護士の方々に、入居者様の状態を解りやすくグラフ化して提示するというようなシステムになっております。

続いて、バイタル測定支援システムについて説明させていただきます。

介護士の皆さまの日々の業務を、我々のシステムで強力にサポートし、その結果、介護士の皆さまに余裕が生まれることで、ケアの品質の向上を図りたいと思っております。

まず、ステップの一つ目としまして、看護師・介護士の皆さまが、各種測定器、血圧計、体温計等で入居者様の各種医療データを測定します。

その測定したデータをステップ2としまして、看護師・介護士様が持っておられる端末に自動で送信して、確認後、送信ボタンを押すことで電子カルテに登録をするというような形になっております。

続いて、19ページのシステム全体像です。ちょっと込み入っていますけど、大きく三つあります。

測定支援、あと内線通話、データ分析、この大きな三つを柱としまして、まず測定支援としては、さきほどちょっと説明をさせていただきましたけれども、バイタルデータを手書きメモ等をせずクラウドに上げると。測定したものを、スマートフォンのアプリを通じてクラウドに上げる。

見守りロボットの方で環境データ、温度・湿度等をクラウドに自動で上げます。

さきほどのナースコールですね。内線通話として、職員同士の会話、また、入居者様と職員の方のコミュニケーションを円滑にします。

三つ目としましてはデータの分析ですね。こちらの結果を、パソコン上のブラウザでチェックすることができるというようなシステムになっております。

今回のプロジェクトのメンバーですけれども、さきほど紹介させていただきました、実証実験・各種データ取得の御協力ということで、中津総合ケアセンターいずみの園様。

あと、技術的なところで四つ柱がありまして、音声処理システム研究開発、あとAI開発、IoTハードウェア開発、各種アプリ開発というところで、大分大学様、株式会社クオックス様、また、アーカイブ技術研究所株式会社様、当社のモバイルクリエイトという形でプロジェクトを構成させていただきました。

続いて、21ページになりますけれども、今回開発したハードウェアとしましては、見守り端末ですね。このようにプロトタイプ機で開発を進めまして、最終的に完成したものについては右上のオレンジ色のものになって

おります。これも事業者様にヒアリングして、どんな色がいいですかというところで、やっぱり暖色系がいいということで、クリーム色やオレンジ色で準備させていただいております。

続きまして、22ページです。

ソフト開発として、大きく四つあります。

まず一つ目として、データビューアーですね。さきほど御説明した環境データ、温度、湿度、気圧、光、CO₂濃度、これらのデータをあげまして、このような形で見守り端末があげた各センサーの値をグラフで表示することができます。

続いて二つ目ですけれども、通話アプリです。これは、スマートフォン上のアプリケーションなんですけれども、見守り端末の方でナースコールボタンを押すとスマートフォンのアプリケーションが反応しまして会話ができます。さきほどちょっと触れましたけど、このアプリケーション同士の通話も可能になっております。

続いて24ページです。

三つ目としまして、バイタル測定支援アプリ、こちらスマートフォン上のアプリケーションになっておりまして、体温計等で測定した結果をBluetoothを経由して自動的にスマートフォンに通知されます。それを確認後送信することでクラウドサーバーに送信することができるようになります。

続いて、最後の四つ目になりますけど、バイタル測定支援アプリ、こちらについてはパソコン上のアプリになっております。この右側の流れで説明しますけれども、さきほどのバイタル測定器で測定した結果をスマートフォンのアプリで受け、送信すると当社のクラウドサーバーに上がります。そちらのサーバーに上がったデータをバイタルデータ転送ツール、左側にあるようなこういうツールを使うことで、いずみの園様の既存の電子カルテシステムにデータが移ります。これをすることで、手書きとかそういうような作業がなく、登録ができるようになります。

次いで、実際の実証実験の写真を用意させていただきました。

こちらは、入居者様が休まれるベッドですけれども、こちらに、さきほど写真にあった見守りロボットをこのように設置しております。ちょっと写真だと分かりにくいですが、振動センサーもベッドの背面に付けているような形になります。

今後の展望ですけれども、当社のシステムとして、このメインサーバー、医療ビッグデータベース、あとAI分析を構築することによって、まず入居者様、患者様のバイタルデータ、音声データを弊社で収集いたします。これを、医療ビッグデータとして蓄積しまして、それを大学ですとか医療機関、あとは協業していただける他社さんにデータを提供して、それをそれぞれの知見を生かして解析した結果を、当社のAI分析システムにまたフィードバックしていく。より良い、精度の高い分析、異常の検知をフィードバックしながら進めていって、もちろん、この左側にあるように、見守る方ですね、介護施設の方とか医療機関の方、家族の方にお知らせすることはもちろんのことなんですけれども、それらの分析した結果を、例えば地域別の病気リスクの情報ですとか、そういった形で行政機関にも提供させていただいて、例えばこの健康に向けた今後の支援を検討するにあたっての情報として御提供できれば、我々としては良いかなと考えております。

ちょっと駆け足になりましたけれども、以上、説明とさせていただきます。ありがとうございました。

毛利委員長 ありがとうございました。

それでは、次に後藤様、お願いします。
後藤参考人 この度、「おんせん県おおいた」の魅力を訪日観光客に伝えるためのQRコードを活用した多言語翻訳プロジェクトということで取り組みましたので、そちらの活動を御報告いたします。

おおいたIoTのプロジェクトとしてこの度採用していただきましてありがとうございます

ました。

デジタルバンクをはじめとする7社法人で、今回コンソーシアムを組み、取り組みました。今年度の3月までということで活動をしましたので、そちらの報告をさせていただきます。

まず、プロジェクトの概要なんですけれども、まず、大分県におきまして、皆さん御承知のとおり、非常に訪日観光客が増えております。こちらは宿泊者数だけなんですけれども、宿泊者数という観点で見ましても、2011年に20万人余りだった大分県内の宿泊者数がだんだん増えてきてまして、2013年、2014年は35万人程度。それが2015年には55万人を突破し、2016年が60万人を突破、そして、2017年は80万人を突破ということで、急激に増えております。さらに今後、2019年のラグビーワールドカップ、あと2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けてさらに増加していくことが期待されています。

また、この構成におきましても、大分では特に、韓国、あるいは中国、香港、台湾、こういったところからの旅行者が多くなっております。

一方で、訪日観光客は増えているんですけども、滞在中何が困っているかといいますと、施設等のスタッフとコミュニケーションが取れないですとか、多言語表示の少なさ、分かりにくさ、こういった言葉の壁というのが、訪日観光の最大の課題であると言われております。

こういった言葉の壁を壊すということが、非常に訪日観光を促進していく上で必要でして、この言葉の壁を壊していくことにより、訪日観光客にとっては、旅先での不便、不安を除去することができますし、日本の良さを、より満喫していただくことができます。

事業者にとりましても、訪日観光客対応を効率化することができますし、今までは、来るとちょっと困ったなという感じのところ、より高度なもてなしを実現していくことができるようになります。

大分県経済全体としましても、観光地の地域経済が活性化しますし、日本一のおもてなし県、こういったことが実現できてくると。

そういったことで、一つの観光の最重点施策であります海外誘客を強化するといったことにもつながってきます。

今回どのようなソリューションを提供しているかと言いますと、QRコードを活用した多言語翻訳サービス。日本の中、大分の中には、日本語だけしかないもの、外国人が来て、やはりアルファベットだけだとか平仮名が分からないですとか、そういった方が非常に多いんですけども、そういった方々が日本語だけしかないものを見て戸惑っているときに、QRコード、二次元のバーコードですけども、これらをそちらの方に全部付けていきまして、それを外国人が手持ちのスマートフォンでスキャンすることによって、そこに何が書かれているか分かる。こういったソリューションがあると便利ではないかということで、しかもこのQRコードを事業者側に無料で配布して、それで外国人の方も、スマホでこれを無料で使っていただくということで言葉で壁を壊していこうというのが今回の取組であります。

具体的に今回のプロジェクトにおきましてどのような事業を行ったかと言いますと、四つのプロジェクトを行いました。

一つ目が、図入り多言語翻訳ページの開発、二つ目が、大分県観光用機械翻訳エンジンの開発、三つ目が、QRコードの県内観光施設への配布、四つ目が、外国人のためのスマホ町歩きマップの開発です。

この四つ目に関しましては、提案時は海外への大分県観光情報発信サイトの開発としていましたが、実態に即した形で本報告書では記載を変更しております。

まず、一つ目の図入り多言語翻訳ページの開発なんですけれども、案内図ですとか、例えば温泉の館内マップですとか、こちらの県庁の館内マップとかを見ましても日本語のみの表示で、もしも外国人の方が今後いらした

ときに、英語とか中国語とか韓国語の表示はない、あるいは少ないとなっています。そういったときに、こういったものを多言語翻訳することができるかと便利じゃないかというのが一つ目です。

二つ目が、大分県観光用機械翻訳エンジンの開発ということで、様々な機械翻訳というものがGoogle翻訳ですとか、非常に進化が著しいんですけども、ただ、観光に即したものの、あるいは地域特有のものはまだまだきちんと翻訳されていないといったところがあります。例えば、関アジですとか、豊後牛ですとか、やせうまですとか、こういったものに関して、あらかじめ英語とか中国語とか韓国語とかにきちんと翻訳されるような辞書を作りましょうというものが二つ目のプロジェクトです。

三つ目が、QRコードの県内観光施設への配布ということで、このQRコードを発行しておりますのがタグフィットという一般社団法人なんですけれども、こちらと、あと、クリオシティおおいたですとか、まちづくり臼杵、別府市旅館ホテル組合連合会、こういった地域やまちづくりに密着した法人、団体が連携して、県内の観光施設に配布していきましようということになります。

四つ目が、外国人のためのスマホ町歩きマップの開発ということで、このような形で、各市町村にQRコードを配布していったときに、各市町村の中でこういったところに多言語対応しているところがあるかといったことが簡単に分かるような地図を作りまして、例えば別府市で、韓国語が使える居酒屋さんはここにあるですとか、湯布院で中国語が使えるそば屋さんはここにあるですとか、そういったところが地図上で分かる、こういったものを開発してきました。

事業の概要としましては、平成29年9月から平成30年3月までです。

事業規模としましては、事業費が2,200万円、補助金が1,100万円といった事業であります。

実施体制としましてデジタルバンクが全体の取りまとめをやりまして、ジャクール、イジゲンがアプリの方を受け持ちまして、タグフィット、クリオシティおおいた、まちづくり臼杵、別府市旅館ホテル組合連合会がQRコードの普及活動を行うと、こういった座組になっております。

こちらのタグフィットが、今回のこのプロジェクトで「第5回IoT Lab Selection」、経産省主催のIoTを活用したコンテストに応募したんですけども、全国で116社が応募した中で、最終的に最優秀はとれなかったんですけども、最後の七つのファイナリストに、地方創生枠としては唯一残りました。

プロジェクトの成果なんですけれども、今の進捗状況としましては、図入り多言語翻訳ページの開発は、システムが完成しまして、ぎりぎりなんですけれども、3月26日にリリースいたしました。

2番目の、大分県観光用機械翻訳エンジンの開発に関しては、システム・辞書は完成しまして、2月にリリースが終わっております。

3番目のQRコードの県内観光施設への配布に関しては、3月19日現在1,520施設に配布済みで、3月中に1,750施設に達する見込みです。この調子でいきますと、大体4月中には2,000施設に達する見込みであります。

4番目に、外国人のためのスマホ町歩きマップの開発なんですけれども、サイトの方はほぼ完成しまして、現在試験運用中です。

一つ目の図入り多言語翻訳ページなんですけれども、3月26日にリリースしました。これからは、温泉旅館とかテーマパーク等、ニーズの高い施設に導入を進めていきます。例えば、今リリースしましたのが、これがトキハ別府店のフロアマップなんですけれども、こういったフロアマップが日本語だけしかなくて、別府に海外からのお客様がいらしたときに、このフロアの中に何があるのかが分からない。でも、それは全部日本語だけしか書

かれていないとなりますので、この日本語しか書かれていないものの一つ一つに、このように番号を振っていきまして、その番号の何番が、英語の方が見たら英語で、これは何になると言っ、具体的にはこういうものですよと、こういったことが分かるようになっております。

二つ目が、大分県観光用機械翻訳辞書開発なんですけれども、こちらは、大分の固有名詞2866語を、英語、中国語、韓国語に正しく機械翻訳するための辞書を開発しました。グーグル翻訳、こちらが非常に優秀だと言われるんですけれども、これらよりも精度が高くなっております。

例えば、関アジというものは、Google翻訳だと「Sekijaji」、そのままなんですけれども、アジというものがどういうものか分からないとこれが何だ分からないので、「Sekihorsemackerel」というふうに。それで、「Local Premium Horse Mackerel」ということで、地元の高級なアジなんだよと、こういったことが分かるような翻訳ができるようにしています。

あるいは、城下かれいとなりますと、まだまだ城下かれいということが分からないので、「Castlecastle」という城が二つ並んだような形でしかグーグルの方では翻訳しないんですけれども、こちらの方も「Shiroshitarighteyeflounder」と。あるいは、やせうまとかになりますと「Skinny」と、やせた馬としか翻訳されないんですけれども、これを「Yaseuma Dessert Noodles」と、こういった感じで、それぞれ辞書に登録しまして、機械翻訳でうまく翻訳できるような形につなげてきております。

多言語QRコードの配布なんですけれども、3月19日現在、1,520施設に配布済みです。3月中に1,750施設に達する見込みなんですけれども、左の図のグラフの方がうまく映っていませんでしたので、こちらの

カテゴリーネーム、多い方から順番に、飲食が640件、宿泊施設が432件、小売りが168件、その他が280件、というのが3月19日現在の導入状況であります。

そして、市町村別ですと、別府市の500件、大分市の244件、由布市の203件をはじめとして、県内各市町村津々浦々に、今導入が進んでいるといった状況であります。

実際に配布されているところはどんな感じになるかといいますと、このような形で、QRコードが置かれている、こういったカードがあったりですとか、こういったステッカーが貼られたりだとかしていますので、もしかしたら気を付けて御覧になると、こういったお店で多言語化されていますよといったことが分かるような状況になっております。

あるいは、県内の代表的な施設にも導入が進んでおります。例えば高崎山、別府市温泉MAP、姫島のジオパーク、こんなところにも導入は進んでおまして、このQRコード自体はそのまま使えますので、こちらの方のQRコード、お手持ちのところでもそれぞれスキャンしていただきますと、それぞれの案内が出てきます。普通、日本語で設定されている場合が多いと思いますので、最初は日本語で出てきますけれども、これが上に英語ですとか言語を切り換えるところがありますので、こちらで切り換えていただくと、英語とか中国語も出てきます。

あと、観光施設ではなくて、飲食店とかお土産物屋さんとか商品等、喜楽庵や赤司菓子舗、あとジャム屋さんですとか、こんなところでも導入が進んでいます。

あと、町歩きマップですが、湯布院や別府で今、ほぼほぼできてきましたので、今試験運用を開始したところです。各国語に対応した施設を地図上で探すことができるようになってきています。今現在、大体利用者数が、過去30日で延べ4,500人、1日当たり150人。閲覧ページ数が、1日当たり1,060ページぐらい読まれているというのが今の状況であります。

今後の課題と対策なんですけれども、課題としましては、導入施設に関しまして、配布地域にムラがあります。あと、配布されても必ずしも設置されていない施設があります。あと、設置の方も長続きしていない場合があったりですとか、魅力あるコンテンツを必ずしも掲載できていないと。さきほどのような写真ですとかそういったものを組み入れていくと結構きれいになるんですけど、まだ写真だとかこういったものが入れていないところもあります。

あと、訪日観光客としましては、多言語化のサービスがほとんど知られていなかったりサービスに満足できていない場合があります。こういったことの対策としまして、継続的な配布活動、導入施設のニーズ調査、定着に向けての組織作り、定着への啓蒙活動、サービスの継続的な改善、あと、訪日観光客への積極的な露出、訪日観光客へのニーズ調査、サービスの継続的な改善、こういったことが今後必要ではないかと考えております。

以上ですが、あとは参考資料としまして、その他の配布施設に関して後ろのページに載せてあります。

以上です。どうもありがとうございました。
毛利委員長 ありがとうございました。

説明をいただきましたので、これより質疑、意見交換に入りたいと思います。

麻生委員 民間が持っていらっしゃるデータをどれだけ活用して政策に生かすかという意味で、ぜひとも官民データの利活用、相互乗り入れがこれから必要だと思います。今回の議会でも、鯖江みたいなオープンデータの活用を、もっと大分県でも積極的にやろうということで、その方針すら今までなかったんですけど、方針をしっかりと決めて、オープンデータの利活用推進計画を策定するようになっていきますので、ぜひ両者とも頑張っていて、いろんな意見とか盛り込んでいただければなということをお願いをしておきたいと思います。

それで、観光も困っているし、モバイルさんのやっているバス事業とか、沖縄で始まっ

たのが今何と、関西でこんなに広まっているというのにびっくりしたんですけど、大分が一体どうなっているんだと、苦労していると聞いているんですけど、ぜひ森本さんを通じて、金融畑の方からプレッシャーをかけてもらわんと、どうも大分だけじゃ無理みたいだし、県が相当バックアップしないと、西鉄資本に負けちゃうんで、ぜひ頑張ってもらいたいと思います。

今聞いたら、前と後ろ、両者うまくやったら公共交通とかいろんな観光アプリとのセットも含めておもしろいことができるんじゃないかなというのを今思ったような次第であります。

特に、デマンド交通とか福祉バスとかそういった部分も含めて、移動制約者がめちゃくちゃ今、大分県下、観光に行くにしても公共交通がなくて、鉄道も苦労している、バスも苦労しているけれども、デマンド交通をどうするかとかも、モバイルさんが最も得意とする音声とセットの部分でやってくれるだろうし、観光という視点では、RESAS（リーサス）のアイデアコンテストの最終グループに残っているチームの中に、瀬戸内海にはモバイルさんが最初スタートしたときの海上無線システムを導入した、何万という遊んでいる超高級クルーザーがあるらしくて、それを活用するとかシェアできないかという提案もあって、こんな課題ですぐには難しいというようなやつも出ているんですよ。だから、そういったのをうまくやっていただくと、これはめちゃくちゃおもしろいことになるんじゃないかなというような思いもしているんで、これは村井さんの一番得意とする分野で、そして好きな分野でしょうから、ぜひチャレンジしてほしいなど。アイデアコンテストの最終審査に残った発表、プレゼンは全部動画であって、見れますから、ぜひそういったのを活用していただいてやっていただけるといいなと思います。2019年のラグビーワールドカップのとき、大分県内の宿泊施設が足りないと言っていますが、西大分に全部、瀬

戸内海のクルーザーを宿泊用に置いてくれる
といいなとかおもしろいこともやってくれる
といいなという気もしていますし、そういった
人たちがQRコードを使って、またあそこ
からぴゅっといろんなところに行っておもしろ
いものを見てくれるとおもしろいなど。勝手
な意見ばかり言って申し訳ないんですが、
そういうふうなことをぜひ、2019年まで
あと僅かですけれども、思い切りやってい
ただければなと思っています。

それを実現するためにも、官民データの利
活用推進の計画策定をうちの情報政策課がや
るそうですから、一緒になって、より早くい
いものを作って、民間の皆さんが、官のデー
タをもっと早くに、古くて使えないデータじ
ゃなくて、使えるデータを活用できるような
双方向でのやり取りができるようお願いを
しておきたいと思います。

そういった意味で、何かもし困っているこ
とが各社、もっと県がこういったデータを出
してくれたらいいのにねとか、産業連関表と
か、あるいはRESASも含めてでしよけど、
何かそういう思いがあれば、それだけお
聞かせください。

後藤参考人 県のデータをオープンにとい
うよりも、我々もまず、ミクロのデータを集
めるためのインフラに我々の方がなれると思
っていますので、今までの1,500件の施設
も入れさせていただいたんですけれども、さ
らにこれをきめ細かく入れられるように一緒
にさせていただくと、その中で出てきている
データで、例えば今、訪日観光客が増えてい
ると思うんですけれども、どこからいらした
方がどこの市に行って何を見ているかとい
うことが、多分県ではなかなか分かりづら
いんじゃないかなと思いますので、我々とし
ても、そういったことが分かるようなインフラ
作りをしようと思っています。むしろ、それ
でこのプロジェクト自体は大分を一つのパイ
ロットとして、それで日本全国に広げていき
たいと考えていますので、そういった意味で
は、逆に、来年度以降も大分県さんにそうい

ったインフラづくりのところを強調してい
ただけるとありがたいなと思っています。

桂参考人 一応、今、関東の方で公共交通
オープンデータ協議会という2020年に向け
ての、JR様とか公共交通はみんなオープン
データ化しようという集まりがありまして、
当社は大分なんですけど参加しています。そ
ういうものがやっぱり地方に起きてきて、そ
ういうものを自由に使って、新しい、何か我
々が思いもつかないようなものが本当に市場
に投入できるきっかけが作れるといいなと思
っています。当社だけではなくて、本当にい
ろんなエンジニアたちがそのデータを使って、
思いもかけない、さきほど言われたようなク
ルーザーとかっていうようなものもあります
けれども、そういったものがオープン化され
ると、本当に会社だけではなくて、一般の方
で、本当に腕に自身のあるエンジニアとかが
作るようなきっかけができるといいなと思
ってはおります。

麻生委員 公共交通の計画策定については、
新年度、大分市、別府市、由布市で、具体的
策定作業をやりますので、ぜひ情報政策課の
方やこういった専門家の方にも入ってもらっ
て、今までにないアイデアを入れていただけ
ると、また東京のそういったものも含めてや
っていただけると新たなものが生まれるかな
と思っていますので、ぜひお願いします。

それから鯖江では、地域に活用できる鯖江
のためのアプリを366個、毎日1個作る
ということで作ったという話も聞いています
ので、そういったチャレンジもしていただい
て、やっていただければありがたいなど。ぜ
ひ、皆さんの力で大分を元気にしていただ
ければと思っていますので、よろしくお願
いします。

末宗委員 後藤参考人に聞きたいんだけど、
11ページ、事業費が2,200万円で補助
金1,100万円だけど、利益はどこから生
むのかなど。

後藤参考人 こちらは、基本的に無料でや
っているんですけれども、一部、例えばさき
ほどの別府トキハさんでやっている案内板は、

月に千円とか1,500円ぐらいをいただくという形にしているのと、あと商品に乗っている場合、例えばさきほどのジャムの場合ですとかそういったものも月に1,500円ですとかいただいています。

そういったことでやっても、全体からすると僅かなものにしかならないんですけども、あと、いくつか収入源というものは作ってしまして、これから始めるのが決済ですね。こういった翻訳を導入していったところに、Alipay決済ですとかそういったことを入れることによって、そちらの決済手数料が入ってくるような仕組みになってきたりですとか、あとはそういうことをやっていく中で、日本全国、あるいはこれは世界中に実は広げていきたいと考えてしまして、そうしますと、新たな広告のインフラになると考えています。やはり日本に来ている外国人の方というのは、ふだんいるときよりも全然お金を使おうと思っているんですけども、なかなかお金が落ちていないというのがありまして、でも、実際彼らはスマホを使ってずっと活動をしているので、そこで、ここでこういったいいものがあるんだよという広告がいいタイミングで入れられるようになるときちんとお金が落ちるようになるんじゃないかと考えています。

末宗委員 日本全国とかにずっと広げようと思ったら、金の回転率が物すごくこれ悪いじゃない。それで、事業広げられるかなと俺心配しよるんじや。やっぱり事業というのは、こういう開発をやれば、ものすごく価値が高くないとこういう産業はなかなかできないもので、そういう中で無償とか言いよったら、それを何か取れんのかなと思うんだけどね。今やっぱりこれ有料にできないかな。

後藤参考人 いや、これは逆に無料で広めていって、やはり技術革新が非常に進んでいるので、実はこれ多言語翻訳とか自体はほとんどコストがかからないんですよ。そうなりますと、今、これを登録するときには、実際には日本語しかないものがあつたらそれを写真

を撮っていただいて、その写真をアップロードしていただくと、全部、多言語翻訳されるという状況なんですけれども、1件の施設をやるのに数百円で大体できますので、それで、それぞれのお店の方が自分のところの写真だとかそういったものをどんどん撮っていけば、基本的にほとんどコストがかからずにこういったサービスを展開することができます。

末宗委員 金融会社はどんなふうに言いよるの。メインはどこでもいいけど、金融会社が結構、発達しているからね、そういう系の見通しを、融資する前に立ててから融資するさね。

後藤参考人 実は、これは融資とかはなかなかそぐわないところで、実際に大分ベンチャーキャピタルさんをはじめとして、ベンチャーキャピタルさんが今月末に1億円以上出資していただくという形で、どちらかということこれはインフラ作りにお金がかかかりますので。

戸高委員 この言語がまず多言語ということ、これ今5か国語ぐらいですか。

後藤参考人 4か国語です。日本語を入れて5か国です。

戸高委員 これは、今さっき言った言語機能が発達しているということなので、多言語でもう少し広げられないのかなということと、それとあと、これは今年度事業で一応3月で終わって、今後どういう方向で管理運営していくのかということと、それぞれの個別の店舗の情報の更新についてどういうふうにやられるのかなというのを聞かせてください。

後藤参考人 多言語に関しましては、おっしゃるとおり翻訳エンジンをかければ何語にでもなるので、理論的には何語にでもできるようになっています。基本的には、英語に変えるところをきちんと作れば、英語を基にしてスペイン語とかフランス語ですとか、そういったところに変えるのは、かなり精度が高くなるようになりますので、そういったことを今、もう開発は終わってしまして、それがどのぐらいできるかということを見ているところであります。

翌年度以降の管理ですが、これは継続した取組をやっている中で、今回大分県に特にやっていただきましたので、管理は全然、今までどおりでやっていきます。それで、各施設の中で更新がありましたら、スマホあるいはパソコンで日本語を、例えば何らかの飲食店でメニューの金額が変わりましたと言ったら、パソコン上で金額を変えていただければすぐに反映されますし、何でも変更がありましたら、日本語を変更すると、自動的に翻訳が変わっていくという仕組みになっています。ですから、その辺も何ら問題なくできていますけれども、この最後の課題対策に書いていますような今後の定着ですとか、あるいは露出をさらによくしていくということが一つ大きな課題だと思っています。特に、ほぼほぼ今、各市町村のまち歩きの地図、スマホ上の地図というものができてくるんですけども、これをうまく活用して、大分空港であったりですとか大分駅であったりですとか、各市の駅だとかバスセンターだとかそういったところで、入ってきた外国人の方に、この街には多言語化されているところがたくさんあるんだよということをどうやって知らせていくとか、そういったことをこれからできるようにしていくのが一つ大きな課題だと考えています。

戸高委員 多言語のツールというのは、全国的に見たら各種いろいろあって、外国人の方がどれがいいのかとかいうか、大分に来たらこのQRコードを使うのかとかいういろんな問題も今後あるのかなということと、広がれば広がるほどセキュリティの問題とかいろいろ出てくる可能性もなきにしもあらずなので、要するに観光案内だけでやっているのであればその問題はないと思うんですけど、QRコードの活用という意味で。

それとあと、やっぱり導入にお金、さきほどどうやってもうけているのかというのがあったと思うんですけど、広がるという意味では、さっきおっしゃったように無料配布、誰でも簡単にアクセスできるというのは、やっ

ぱり一番広がる道かなというのは思うんですけど。その後の継続を考えたら、ちょっと大丈夫かなという心配があったものですから。後藤参考人 セキュリティについては、これは観光なのでそれほど問題にはならないかなと思っているんですけど、これから広がっていくところに関しましては、やはりデジタルの世界は使われれば使われるほど収益化できると。例えばフェイスブックなんかも、もともとはどうやって収益化するかというのが非常に難しかったと思うんですけど、今あれだけの会社になっているというのは、使われて初めて事業になると考えています。それに、最初に資本をある程度入れた形で今やってますし、これを、大分から日本全国に広がっていくといったことをやっていきます。

羽野委員 QRコードの無料配布の関係で、対象施設への周知については、行政から例えば商工会議所とか商工会を通じて事業者の方に周知をやって、事業者が申し込むみたいな対応をとっているの。

後藤参考人 はい。基本的にそういった対応を取ろうとしています。さきほどの配布にむらがあるというのは、それが積極的にできている地域とそうでない地域があったりだとかしていますので、これは行政とかと連携しながらやっていきたいと考えています。

羽野委員 もう一点。モバイルクリエイトさんの方ですが、県内、周辺部に行くと、まだまだ今携帯電話の不感地域があって、行政が整備をやって、家のある付近はデータでは入ることがありますけれども、その間に電波が通じない地域がまだあるんですけど、その辺の支障というのはないんでしょうか。

後藤参考人 無線機においても、今、弊社はドコモさんのキャリアを使っているんで、人口カバー率ほぼ100%です。おっしゃるとおり人のいないところにデータはないというのは事実ですね。そういった場合にどうしているかという、弊社にドコモ様からデータが届くところまで弊社が無線機を置いておいて、その先は特小無線とかアナログ無線と連

携して飛ばすようなこともやろうとしています。そういった需要もあります。特に災害時ですね、遭難された方がいるとかいったところにやっぱり電波が届かないときが多いとそういったお話もあって、そういう取組も進めております。

桑原委員 御説明ありがとうございます。

モバイルクリエイイトさんの医療看護支援システムについて、今後の展望を見させていただきまして、非常に可能性を感じております。ちょっとうまく説明できるかどうか分からないですけども、今政府の音頭取りで医療データのネットワークの構築というのは、各自治体、県とかでも取り組まれています。大分県でも、医師会さんメインで医療情報ネットワーク協議会みたいなのが去年か何かあったんですけども、全県的なネットワーク構築はやっぱり難しく、今後の成り行きを見るところで解散された経緯があって、医療機関のデータを横断的に連携するというのは、非常に情報流出とかそういうリスクで難しい。それなら、個人の情報を個人が自分であげて、それを連結させる方法ということで、政府で去年閣議決定された未来都市戦略の中で、そういう個人があげるPHRのデータを連携というのも提唱されているところがあって、このオープンイノベーション推進のところを見ると、何かそれにつながりそうかなと。ここでは、データの収集が見守り対象者と協業他社というところになっていますけど、スマホのアプリの開発もされているということで、スマホのアプリから自分のバイタルデータとか処方データとか医療データをあげて、そうすると、自分の情報ですから医療機関にはリスクはありませんし、それを連結させて匿名化したビックデータでそういう情報を、正にこの地域別のリスクを県に知らせるとか、そういうのを実は去年の9月に一般質問で提唱させていただいたんです。なかなか行政がそこまでできるかどうかというところはあるんですけど。これに、例えば県が今、歩得（あるとっく）とかで歩いた歩数でポイント

を提供するとか言っているんですけども、個人データの提供に関して県がそこにポイントを出すとかすれば、そういうデータも集まるでしょうし、あとさらに言えば、自分が行った病院の評価もその個人がして匿名化したら、その自分の評価の、病院の評価も病院側に提示できるとか、そういうシステムまで広げて県に提案していただけたらと思うんですけども、いかがでしょうか。

桂参考人 我々もちょっと、これは一つの柱にしたいと思っておりますので、いただいた意見を社内に持ち帰って新しく考えてみたいと思います。

木田委員 モバイルクリエイイトさんですけども、資料の最後の方にちょっと先の未来ということを書いていらっしゃいますが、今、「OITA4.0」というのを進めていますので、多分、今日の御説明のやつはまだ3.8ぐらいの技術運用だと思うんですけども、これから、例えばGPSもみちびきの運用が始まったら精度が5センチぐらいになるとか、タクシーの法規制とかも変わってくるとこまでできるよとか、その4.0の世界はここまで御社として考えているという世界があれば、技術的なところとか、いろんな規制の問題とか含めて、こういうことがなくなればこういうこともできるし、こういう技術もやろうと思っているという展望を聞かせていただきたいと思います。

それと、QRコードの関係なんですけれども、これは基本、Wi-Fi環境というか通信環境がないと見られない仕組みになっていると思うんですけど。Wi-Fiがちょっとまだ、大分は設置台数がやっぱり少ないと思うので、県としてもそこは増やさないといけないと思うんですけども、いいプラットフォームができてこれから拡張していくことなんですけど、さっき見ると結構詳しい情報が出てくるなという感じで、多分、外国人観光客はもうちょっとシンプルな情報がぽんと出てきた方が、おもしろいとか分かりやすいんじゃないかな、日本のものを見てで

すね。そういう感じで、実際インバウンドの方には自分が見た大分の景色とかを、SNSで発信をしてもらいたいですよね。そういうSNSについて、その日見て、多分移動中とかホテルに入ってそれを友達に発信してもらおうというようなフローを想定したような観光アプリに今後成長させていただけるとありがたいと思います。収入のフローと、そういうインバウンドを発信するフロー、その二つの両面から、いいアプリにということです。

桂参考人 我々のちょっと先の未来といいますと、今我々のソリューションとしては通信を使って音声というものを使ったソリューションが非常にヒットはしておりますが、今後は5Gと言われる高速な、今は4Gと言われておりますけれども、5ジェネレーションという、5世代という通信方式が2020年頃ドコモさんの方から商用化されるような形になっていまして、それは非常に高速な通信になります。それで何ができるかという、自動運転であったりとか、高速に反応するので、サーバー側との通信であったりとかいうのが非常に高スピードでレスポンスを返すことができるようになります。そうした中で、自動運転という分野に関してもちよつとずつ、東京大学なんですけれども、我々はそういうところと接触しながらやっていて、一つおもしろいなと思うのは、大分県というのは、よく高速道路が止まるんですね。全国的にも一番止まると言われる高速道路なんですけど、そこに自動運転車だったら通せるのかとか、こういったところは法規制とか、警察庁とかいろんな問題がございますけれども、そういったものであったりとか、あと、5Gになると動画になるかなと思っています。今、我々のソリューションで、この前観光バスが事故ったときに、動画がニュースに流れてびっくりしたようなのが、リアルタイムに常に車両の何かの情報をセンターの方でも分かるといった世代が来るかなと。その開発というのはだんだん行っている状況になっています。

後藤参考人 今2点あったかと思うんですけ

れども、一つ目の、外国人に分かりやすい情報という点に関しましても、そのとおりだと思っていまして、今これは機械翻訳で全部やっているんですけれども、実は今、もう一つ別のサービスもメニューの中に入れていまして、それは、日本語の情報をもう一回外国人が、外国人目線で全部リライトするという、これは有償になるんですけれども、各市の単位で、その市の中で非常に外国人を呼び込みたいところ、四、五十か所ぐらいを、外国人目線で全部書き直していくということをやっている、それとこの機械翻訳を組み合わせることで魅力的にできるんじゃないかなと思っています。

あと、SNSに関してもおっしゃるとおりのお話だと思っていまして、私どもも、今開発スケジュールの中では、SNSの機能をどんどん強めていくといった感じでやっています、今写真が出ているものも、施設側が入れているものと、ユーザーが撮ってユーザーが入れているものと実は両方あるんですよ。ユーザーが撮って、それでまたハッシュタグをつけて投稿できて、それがこちらの方にも上がるし、それぞれのSNSにも上がるというそういったものに今、ちょうど今年の夏ぐらいからはそういった感じで持っていくようにしています。

森委員 モバイルクリエイトさん、2016年12月に実はサンフランシスコ、シリコンバレーに伺ったときに、現地の社員さんに大変お世話になりました、ありがとうございました。

当時から1年半たっているのも、また状況がかなりあちらも変わっているのかなとも思うんですけれども、先ほどお話に出た自動運転ではUber（ウーバー）がいろいろと、この前事件になりましたけど、あちらでは、いわゆるタクシーとかじゃなくて、シェアリングエコノミーでUberが主流であったんですけど、そういう市場にあって、さきほどもちろつとお話がありましたが、モバイルクリエイトUSAにおいて、どういう分野でや

っていこうとしているのかというものを詳しく教えていただきたい。あと、もう一つ、大分県でさきほどのバスのモバステーションを提案はしているけれども、他県ではかなり導入されているという中で、大分県で提案しているけどもそれが実現していない理由が何かあるのかなと思うんですけど、その辺が分かれば教えてください。

渡邊参考人 じゃ、私の方から。まず、アメリカの方の現状を。1年半ぐらいたちましたけれども、今現地、もともとサンノゼの方に事務所を構えていまして、年末からお客様が付き始めて、サービス提供を開始しております。実際、サンノゼには、やっぱり業務用無線機を使う業者さんは余りなくて、ちょっと南下してロサンゼルスの方で、輸送とかがメインに、主に行われる。サンノゼはどっちかということと研究施設が多いので、ちょっとロサンゼルスの方に置いて、現地採用をしつつシェアを広げよう。基本的には無線機と動態管理システムでやっております。

アメリカの方で日本と違って評価を得ているのは、ハードからシステム、保守まで、全て一気通貫にやるというサービスがアメリカにはないというところで、優位性を持って市場を拡大しつつあるという状況になっています。今後はまずはそれでスタートして、現地ではスマートフォンでの利用が多いので、こちらサービスラインナップを広げながら、業務用無線機動態管理システムとして進めていく計画になっております。

桂参考人 大分県下のバスロケについては、7年前ぐらいだったかと思うんですけども、そのときは我々も実績が少なくて、今トップシェアと言われるのはNECさんですけども、そこと戦いになりまして、最終的に判断を下されたのはバス会社です。今ちょうどリベース時期なので、また各社さんがお声をかけられまして、我々もかなりの実績があるので、自信を持っていろんな方とお話をさせていただいているんですけども、結局は事業者様であったりとかの判断になりますので、

そこは我々もどうなるかは分からないんですけど、大分県下の会社なので、ぜひよろしくお願いしますということは伝えております。

小嶋委員 モバイルさんのセンサー、ベッドの上にカメラじゃないですけど置きますよね。あれは赤外線、どういう仕組みのものなんですか。オレンジのやつは、カメラではないの。

渡邊参考人 はい、カメラはついていません。赤外線の人感センサー、あと、CO₂の濃度を測るセンサー、あと明かりですね、光を見るセンサーと、あと気温、湿度、それらのデータを取るようなものがまずこのオレンジ色の中に入っています。そこから一つ線が出ておりまして、あとは振動センサーですね。ベッドに付けさせていただいて、ベッドが揺れたら反応するというようなものです。

小嶋委員 違和感は全くないわけね。

渡邊参考人 そうですね、オレンジ色であればですね。最初ちょっと黒色にしたら、やっぱりちょっと浮いてしまったので、相談させていただいて、オレンジ色を採用させていただきました。

吉富副委員長 モバイルクリエイイトさんのさきほど小嶋委員もおっしゃったオレンジ色の箱の件なんですけども、あれはカメラはついていないということだったじゃないですか。ただ、まあいいのは、看護師なり介護士が血圧、体温、これが自動的に登録できるということで、人間が書くミスがなくなるという部分で、それで、多分酸素とか温度を赤外線で見るということは、その人の体温が上がったり下がったりしたときのことで緊急に知らせるといことだと思んですけど、体温が上がると、血圧が高齢者の場合、急にストンと下がったりするんですよ。そういうのが分かるようなものというのを一緒に開発してもらいたいという現場からの声はなかったですか。

渡邊参考人 実際にはそのような声はなかった。常に血圧を測っている入居者さんもいらっしやらないのかもしれないですけども、今ルーチンワークで決まった時間に血圧を測定するというような運用ですので、そういう

お話はなかったです。

吉富副委員長 もう一点、データをずっと集めていけば、一番心配になるのはお医者様なんですね。データだけ見ても、それで巡回せずに終わるといのは結構最近増えているんですよ。そういう部分が本当はないようにしてもらいたいの、その辺は将来の話ですからいいんですけど、ぜひカメラとか付けて人の表情がゆがんだときの部分が、ナースセンターなりとかにも行くような技術というものもやっていただくと、またちょっと違うのかなと思いました。

あと、QRコードの件なんですけど、訪日観光客の部分で今後の課題というところで、サービスがほとんど知られていないとかサービスに満足できていないと載っているんですけども、今このQRコードで私見たときに、このアプリを上げたときに、そのお店の方の熱意によって、多分だいぶ違ってくるんじゃないかなと思っているんですよ。例えば、おうどん屋さんでも、いくつかしか種類が載っていないとか、そういう部分というのは、お店屋さんこういうふうにしてあげた方がいいですよという指導なんかしているんですか。

後藤参考人 まさにそこが課題でして、今、大分県の中ではそういったところに重点的にいくつかのお店をやっていったりだとかして、これサービスを開始して、今ちょうど1年で、この画像とかを使えるようになったのも実はここ二、三か月ぐらいのところなんです。それで、先進的なところがうまく使っていくことによって、こんな使い方があるんだというところを周りが知っていったりですとか、あるいは今回、さきほどの町歩き用の地図とかができてきて、商店街全部が入ったりだとかすると、この商店街をもっと活性化するためには、全体的に見せ方を底上げしようよという話が出てきて、それでその商店街が良くなり、周りの商店街もあそこに負けるなというふうになるようなことをやって、大分県全体が底上げされ、大分県を見ながら、日本の各都道府県が、もっと大分県みたいにな

ろうというふうにやりたいなと思っているところですよ。

吉富副委員長 あともう一点だけ。

インバウンドの方の携帯でそれをするじゃないですか。例えば、イギリスの人であろうがフランスであろうが、東南アジアの国であろうが。その方々が持っている携帯というのは、データとしてどこの国の分というのはストックはできるんですか。

後藤参考人 何語で読もうとしているかということは入ります。

吉富副委員長 ああ、なるほどですね。ということは、多言語で、東南アジアといってもインドネシアがあればタイがあるというような、国の言葉でもしそれが出来上がれば、どの国の人がこのお店に来たかというデータの蓄積はできるんですね。

後藤参考人 はい、蓄積できます。

吉富副委員長 それは、じゃ、将来的には商売になるということですね。

後藤参考人 はい。

吉富副委員長 ああ、なるほど。分かりました。

毛利委員長 私から1点聞いていいですか。

モバイルクリエイイトさんの説明の中でキャッシュレス、日本は遅れていて、外国は50%以上、中国なんかはほとんどですよ。これから日本もそうやって進んでいくと思うんですが、予測としてどういうスピードでいくのか。こうなると、銀行の窓口業務が要らなくなってくるという可能性もあるので、その辺、御社としてどういう分析もしているのか、分かれば教えてください。

桂参考人 そうですね、私もそのキャッシュレスについては、日本人はやっぱり現金主義が結構多いなと思っているんですけど、先月、私はキャッシュレスで1か月いけないかなと思ってチャレンジしたらいいかなと思って、コンビニとか、基本的にスーパーだったらクレジットで買ったりとかやってみて、1か月間全然問題なく、現金なくてもいいなというのは実感しているんですけど、ただ、スーパー

に関しては、まだF e l i C aであったりとかそういったクレジットしかないので、財布を出さないといけないというのがちょっと面倒臭いなどというのはあってですね。スマートフォンで全て完結すると、本当にキャッシュレス時代が来るんですが、まだちょっと、市場が財布を必要とするようなカード類を必要とするような決済機が非常に多いというのと、あと弁当とか買うときはどうしても現金になっちゃう、そういうところですかね。なので、日本はやっぱり一步一步上がってきているので、世界に比べて、東南アジアとか中国のスピードに比べてがらりと変わるということはなかなか難しいなと思っています。ただ、オリンピックを契機に非常に決済機のQRコード、さきほど言われたA l i p a yとかそういうようなQR決済というものがインバウンド向けには必要なので、そういった環境は整うかなと思っています。それに日本人が乗るかかどうかは、女性はちょっと遅いかなと思っています。

後藤参考人 キャッシュレスに対しては、やはり非常に早く進まないといけないと思っています。日本が遅れている理由の一つは、一つ前の時代にシステム化し過ぎていて、例えば、大体の小売店ですとかレストランは、みんなPOSレジとかを入れているので、それとどうインテグレートするかというと、相当実はお金がかかるということが、逆に足かせになっていて、中国だとか東南アジアだとかは、そこが逆に、そういったインフラがなかったので導入が早いということがあるかと思っています。

それで、今回私どもがA l i p a yで入れていくと言っているのも、どういったことを入れようとしているかということ、今A l i p a yが例えばローソンだとかいろんなところに入っていますけれども、それというのは、中国人がスマホ上で自分のQRコードを出して、お店の方がそれをスキャンすると。そうすると決済ができるという形なんですけれども、実は、A l i p a yの方が今月から始め

たサービスで、その逆があるんです。お店の方にQRコードが紙で置いてありますと。それを、中国人がスキャンすると、そうするとそれで決済が終わると。実は、中国でA l i p a yが非常に普及しているのは、ほとんどはお店側に、QRコードだけしかなくて、お客さんがそれをスキャンしたら決済が終わると。極端な話、中国の物乞いとかは、缶の前にQRコードを自分でぶら下げているわけですよ。それをスキャンすると、100円とか200円が、その物乞いの人に行くという。結局それと同じように、お店側にQRコードさえ置いておけばできるというのをA l i p a yも今月から新たに始めました。こういったサービスが一つ、今までのだと、結構お店側に読み取り端末がないとできなかつたんですけれども、そういったものなしで、ただ単にQRコードだけを置いておくとこれからはできるようになるので、そういった点では、これから変わることもできるんじゃないかなと思っています。

毛利委員長 ありがとうございます。

最後に、今日は本課から、商工労働部情報政策課が来ているので、何かあれば、せっくなので。

安藤情報政策課参事 今日は大変参考になる意見がありました。麻生委員も言われていたように、来年度は官民データの計画を作ることになっていますので、皆さまの意見を尊重しながら、最先端のITデータを大分県が使えるような計画をみんなで作っていただけたいと思っていますので、御協力のほど、よろしくお願いいたします。

毛利委員長 ありがとうございます。本日はいただいた御意見は、今後の委員会活動に生かさせていただきたいと思いますので、また引き続き御指導をよろしくお願いいたします。本日は誠にありがとうございました。

〔参考人、情報政策課退室〕

毛利委員長 これより内部協議を行います。お手元に配付した資料に基づいて、事務局から説明します。まず、今後の調査計画について

てです。

〔事務局説明〕

毛利委員長 質疑等はありませんか。

〔「なし」と言う者あり〕

毛利委員長 それでは、来年度の調査については、この案のとおりとします。次に県外調査についてです。事務局は説明してください。

〔事務局説明〕

毛利委員長 では県外調査についてですが、この内容で行うことにしたいと思います。なお、今後調整が必要な事項等については委員長に一任いただきますので、御了承ください。

〔「委員長一任」と言う者あり〕

毛利委員長 この際、何かございませんか。

〔「なし」と言う者あり〕

毛利委員長 以上で本委員会を終わります。ありがとうございました。